

滿鮮諸族の始祖神話に就いて (四)

——その境域性と歴史的意義の究明——

三 品 彰 英

第十二項 獸祖神話の宗教的基礎

獸祖神話がそれを傳承する部族の生活形態と淺からざる聯關を持つて居ること、なほ進んで云へば、その祖として語られる動物の種類及び神話的觀想が、部族生活の基底にある宗教觀念やその表現様式たる儀禮との關係に於いて理解せらる可きであることを推測し得たのであるが、然らば果してかゝる推測が他の方面より如何に説明せられるであらうか。先づ神話自らの語るところ及びそれと直接關係ある諸點に注意を向けよう。

(イ) 突厥の狼祖神話の後に附記して、「故に牙門に狼頭の纛を建て、本を忘れざるを示す」(第四十二例)と云ひ、また別に「旗纛之上、施金狼頭、侍衛之士謂之附離、夏言亦狼也」(北史、突厥傳)と狼祖神話に照應する習俗を傳へて居る。

(ロ) なほ突厥の祭儀に就いて「毎歲率諸貴人、祭其先窟」(同上)と云ひ、西突厥に就いて「每五月八日、相聚祭神歲、遣重臣向其先世所居之窟、致祭焉」と記して居る。即ちかつて狼祖の居たと云ふ神聖視された洞窟があり、

毎歲こゝで部族的祭儀が實修されて居たのである。

(ハ) 蒙古の狼鹿配偶神話に關聯する一習俗として注意すべき記事がデンギス汗に就いて次の如く傳へられて居る。

「丁亥の年の三月十八日、『デンギス・ハン』タンググート地方に出兵したまふにあたりて、たまたまハンゲガイ・ハンなる地方に卷狩りを催はしたまふに、汗は神^{わさ}業のごとき微慮をはたらかせたまひて、つぎのごとくのためふ。『この狩區^{かうく}のうちに一頭のゴワ・マラル〔白き牝鹿〕と一頭のブルテ・テヨノ〔蒼狼〕のいりきたる。この二頭を救ひ出せ、ゆめ屠るなかれ。また人の青灰の色の馬にのれる黒人を生擒りになして連行せよ』と。かく汗の依託^{よたく}せたまへるごとく、蒼狼と牝鹿を救出し、黒人をとらへて汗のもとにつれきたり、云々」〔蒙古源流〕卷四〕と。狩獵の際、蒼狼と白牝鹿が斯くの如き特別な取扱ひを受けたのは、恐らくデンギス汗にのみ關してあつたことではなく、嘗て蒙古族の間に廣く行はれて居た古俗であつたと考へてよからう。

(ニ) 蒙古の祖狼營盤の地は不兒罕合勒敦と呼ばれて居る如く、神山として部族の崇拜するところであり、またデンギス汗は族滅の難に際して不兒罕合勒敦に遁れ、神助により全きを得、子孫にこの神山を祀るべきを訓へて居る。且またこの聖山は汗の墓とも考へられて居たのであつた。

(ホ) 兀良哈の犬祖神話(第四十七例)には、犬の子として生れた始祖が「頭髮黃にして犬の毛の如く眼大にして體遅し」と云ふ特異な相姿であつたことが語られて居り、同系の滿洲族の所傳(第四十八例)には、始祖の頭部に犬の

毛皮が残つて居たと云ひ、且「今の滿洲人は此者の後裔なるが故に、頭上に長髪を残して標となす」と、それが部族的標式の起源であることを説いて居る。この黃頭てふ部族の特徴から想起されるのは黃頭室韋・黃頭女眞と呼ばれた部族名の存することである。即ち、

「黃頭女眞皆山居、號合蘇館女眞、合蘇館河西亦有之、其人薙髻勇鷲、不能別死生、契丹每出戰、皆被以重札令前驅、髻髮皆黃、目睛多綠、亦黃而白多」(契丹國志、卷二十六、諸蕃記)

「黃頭女眞者皆山居號合蘇館女眞……即黃室韋也、金國謂之黃頭生女眞、髻髮皆黃、目睛多綠、亦黃而白多、因避契丹諱遂稱黃頭女眞」(大金國志)

とあり、こゝに云ふ黃頭室韋乃至黃頭女眞てふ名の使用された範圍、或はその種族系統及び住地などに就いては考證せらる可きもの少くないが、少くとも黃頭と云ふ或る通古斯系種族の民族的特徴が、神話的に説明されて居たことは注意しなくてはならぬ一事である。

(へ) なほ兀良哈の始祖が父なる犬の遺骨を名山に葬つたことを語つて居るのも注意すべき點で、雲淵實蹟の選者が「北韓二百餘年來、民俗稱滿清曰五囊犬遺族云々。會寧對岸北路有一嶺今火狐、俗稱五囊犬嶺。亦不無名義之據

云爾。」と、五囊犬嶺或は火狐狸嶺なる聖山の存したことを傳へて居る。さきの突厥が祖獸の聖窟を崇拜して居た如くに、果して五囊犬部族に對してこの聖山が祭儀的にも關係あつたか否かは分明でないが、少くとも滿洲族の間に特定の聖嶺が崇拜されて居たことは他にも例の二三存することである。

(ト) 槃瓠の神話にはその後裔に就いて「五色の衣服を好み、製裁皆尾形あり」と云ひ、或は「世稱赤髀橫裙槃瓠子孫」と傳へられて居り、かゝる民俗的特相が神話的に説明されて居たのである。この種の類例は少くなく、前述のビルマのパロウン族の間では、彼等が龍姫の後裔なるの故を以て、女達がその名残を示す服裝をして居るのであつた(第二十二例参照)。

(チ) なほ後代槃瓠の石室として民間に傳へられる古跡の存したこと、「武陵記曰、山高可萬仞、山半有槃瓠石室、可容數萬人、中有石牀、槃瓠行跡、今案山窟前、有石羊石獸、古跡奇異、尤多望石窟、大如三間屋遙見一石仍似狗形、蠻俗相傳云、是槃瓠象也(後漢書、唐章懷太子賢注)」と云へるが如くである。

(リ) 猪祖神話(第五十一例)を傳承するキルギス族の間ではそのことの故に豚肉を食することは禁忌されて居たと云ふ。

(ヌ) 契丹の白馬青牛の始祖神話の末尾に、「行軍の毎に、及び春秋の時には祭るに必ず白馬青牛を用ひ、本を忘れざるを示す」と附言され、神話が内容的に部族的祭儀と結び付いて居たことを示して居る。

(ル) 遼史地理志永州の條に「東潢河、南土河二水合流、故號永州、冬月牙帳多駐此、謂之冬捺鉢、有木葉山、上建契丹始祖廟、奇首可汗有南廟、可敦在北廟、繪塑二聖并八子神像」と木葉山の聖廟のことを述べ、つゞいて前掲の始祖神話を記して居る。

以上これらの諸點を總括的に云へば、

(一) 祖獸の形相の一部が部族の特徴として殘存して居ると考へられ、或は部族の特定器具の標式としてそれが表されたこと(イ、ホ、ト)。

(二) 祖獸として神話されて居る動物の種族を殺したり食用に供したりすることが禁止されて居たこと(ハ、リ)。

(三) 祖獸神話に關係ある土地が部族的聖地として崇拜され、或はそこで祭祀が實修されたこと(ロ、ニ、ヘ、チ、ヌ、ル)、或又この聖地に部族的偉人が葬られて居ると信じられて居たこと(ニ、ヘ)。

の三項に要約出来る。即ちこれら三項はすべて神話が内容的に近密な聯關を持つて居るところの部族の信仰的事實及び祭儀實修の類であつて、斯の如きはさきの卵生神話要素には餘り見られなかつた點であつた。さきに獸祖神話の分布境域から推して、それが部族の生活形態と結び付いて居ることを想定したのであつたが、こゝに如何なる關係に於いてそれが結び付いて居たかを窺知することが出来る。獸祖神話の理解は、部族の生活形態に則し、宗教的社會的特質と聯關せしめてなざる可きを前述したが、今それは具體的には、右の三項に示された方面に於いて論考せらる可きであらう。が本稿では紙面の徒らに多くなるをばかり、前二項に就いてのみ考察し、(三)の問題即ち部族の聖地及び祭儀の問題は別に譲つて置かう。

右三項の内(一)及び(二)——部族的にはキルギス・突厥・蒙古・兀良哈・女眞・靉靺系諸族を包含着して居る——によつて示されて居る習俗がトーテムズ的なことは、何人も先づ氣付くところであらう。又高車(第四十四例)の末尾に「其の人好んで聲を引き長歌し又狼の嗥ゆるに似たり」と記して居るが、若しこの記事にして、部族の特定の行

事の際彼等が狼聲を模したことを語るものとするならば、そこにトーテムズ的なものを考へざるを得ない。然し嚴密な意味でトーテムズなるものがこれら諸族の間に、上記資料の採録された當時に、現行して居たか否かはすこぶる問題である。元來トーテムズムの段階に於いては、人類は未だ動物を支配せず、寧ろ動物は人類に對して優位であり、それは自然物採取の原始生活段階に榮えた文化形態であり、従つて人類が動物を支配する牧畜農耕段階はトーテムズムの繁榮するところの地盤ではあり得ない。が勿論前期的文化要素が、新文化段階の内にまで残存し、且新要素と矛盾なく結合する例は少くないのであつて、トーテム要素が新文化段階の神話觀念や祭儀實修と結合して残存して居るとしても何等不思議はない。従つてこゝに問題として居る滿蒙諸族が時既にトーテムズムの段階をはるかに蟬脱して居ても、なほトーテムズム要素を残存せしめて居るてふことは充分に承認されてよからう。即ち右の(一)及(二)に指摘した諸點をトーテムズムの考へて大過ないが、然しそれはトーテムズムの現行を意味したのではなく、それの痕跡乃至残存であつたと解すべきである。

右の事例の外、古代滿蒙諸族及びそれに隣接する諸族の内に遺般の名残を示すものは少くない、例へばジョッケルソンはユカギールの氏族名の内動物名を持つものはそれらがトーテム儀禮に聯關して居たことを豫想せしめると論じて居るが(Jochelson, W.: p. 117) 若しちつとすれば、前掲の羌族の參狼種・白狼種・白馬種・麂牛種・冉駝などの種族名に就いても同様なことが考へられるであらうし、又蒙古源流の譯者シュミット Schmidt, J. J. の解した如く匈奴 Chinu とも稱呼は蒙古の祖獸たる Bütte Tchino (蒼き狼) の tchino (狼) と同語であり、(江賀氏譯註蒙古源流)

彼等が狼族たることを自稱して居たものとして、こゝに問題としてよからう。

祖神が動物の形相を以て表現され、或は動物として神話されて居る場合、それがトーテム的觀念に歸因することが少なく、これに就いてスペンスは、

「トーテムイズムは神話の上に於いて屢々出遇ふ一樣相である。トーテムとは、之を簡單に且大略的に定義すれば、一定の社會集團と結合された動植物或は無生物であり、該集團はその名をトーテムから取り、或はそれを標式として使用する。この集團の構成員はトーテム動物或は植物から出自せるもの或はそれと關係あるものと考へられ、トーテムと彼等との間に呪術宗教的な紐帶が存するとなし、該構成員は祭儀的作法によつてか乃至は特定の時期にあらずんばそれを食用に供しないのである」(Spence, L. p. 28)

と要約的に定義し、神話の様態の上に見られるトーテムの例として、白鳥の形相をとるヂュピター Jupiter エヂプトの動物の頭部を持つ神々、古代ブリトン Briton の豕神、その他若干の例を指摘して居る。評するには簡單に過ぎる所説ではあるが、一般論としては要を得たものと云へよう。然しこの所説から直に動物や物體から出誕すると云ふ族祖神話と云へば、その基底に常にトーテム的存在を想定するが如きは甚だしき行き過ぎであること又論を俟たないところである。

滿蒙諸族の獸祖觀念にトーテム的なものを右の如く認め得るとするも、嚴格な意味で所謂トーテムとは同一ならざるものがあり、それに對してトーテムとふ名を以てすることは必ずしも穩當でなく、寧ろこれら諸族の言葉を借り

て、例へばブリヤート語の *khubilgan* 或はヤクト語の *jiä-kyi* などの語を以てそれを言ひ表はした方が、民族固有の觀念をよりよく示すことが出來よう。前掲ブリヤートの牛祖神話(第五十三例)の別傳と考へられるものに次の如き所傳がある。

第六十一例、ブリヤートの神牛説話。

「ブリヤート族の未だ哈爾喀蒙古の地に在りし頃、巨大なる青灰色の壯牛の彼等の只中に出現するありければ、彼等は此の牛を *khubilgan* とせり。」(Holmberg, U., p. 506.)

ブリヤートの謂ふ *khubilgan* とは *khubilku* “to change oneself,” “to take on another form” から變化した語で、謂はゞ靈威的存在の變幻性と呼んだもので、具體的にはシャーマン氏族 *shaman clan* の靈能のよつて來たるところの靈獸を指して居る (*ibid.*)。ヤクトはこの種のシャーマン動物を *jiä-kyi* と呼んで居り、シャーマンはすべて各自の *jiä-kyi* を持ち、彼等の性能及びその生命まで一にこの *jiä-kyi* にかゝつて居ると信じて居る。而してシロコゴロフがツングースの社會組織に就いて指摘せる如く、氏族はその原始に於いてはシャーマン民族的であり、又ジョッケルソンその他のシャベリヤ諸族のシャーマン研究家の所説に従へば、家族シャーマン乃至氏族シャーマンが職業的シャーマン發達以前の基本的組織と推考せられるが故に、巫祖靈的動物は族祖的存在と不可分なものと考へてよからう。斯の如き觀念の族祖意識が強くなつたものにブリヤートの *Utka* てふ觀念があり、グザプリチカはこの語を “descent,” “geneology, a term connoting shamanistic power” と譯述して居る (Czaplicka, M. A., p. 364.)

なほホルムベルクは、

「ブリヤート人にとつては *Utka* てゐる各自のシャーマンの出自に就いて記憶して居ることが大切なことであり、各家族や各氏族はそれぞれの *Utka* を持ち、その成員はその *Utka* に對して特定の義務を負ふて居る」(Holmberg, U., p. 499.)

と説明し、實例としてバイカル以東に住むサートル家 *Sartul* の一族がその *Utka* たるシャーマン動物を食することゝを禁ぜられて居たことを指摘して居る。

獸祖神話を傳承した上掲諸族が當時トーテムズの段階にあつたと考へられないことは前言した如くであるが、彼等の社會組織の基本觀念の一として、右の如きシャーマニズム的な *khubilgan*, *ija-kyl* 乃至は *Utka* なる觀念が廣く行き互つて居たのであつて、從つて又それがこゝに問題として居る獸祖神話の基底にあることを了解されよう。

第十三項 人 獸・相 婚

第六十一例では青灰牛はブリヤート族の所謂 *khubilgan* として部族生活と結び付いて居るに對し、第五十八例のブリヤートの神話では、青灰牛の形相の神異的存在が人の姿をとつて乙女と成婚すると云ふ風に語られて居り、謂はゞ前者は人態化以前の觀想に於いて、後者は人態化の度の進んだ神話的觀想に於いて、しかも同一の社會的宗教觀念が表現されて居るのである。即ち前者は交靈の形式で、後者は成婚の形式で表現されて居るのであつて、こゝでは成婚神話は交靈觀念の發展形相に外ならない。自餘の人獸成婚神話に於いても、這般の發展過程を考へつゝ、理解される

面が少なくなからう。

さて前掲の人獸成婚の形式を大別して、

A型 女性が人間で動物が男性の位置にあるもの。

B型 男性が人間で動物が女性の位置にあるもの、或はそれに準ずるもの。

の二つとなすことが出来る。その内前者に屬するものとしては、第四十四例(高車)、第四十七例(蒙古)、第四十八例(元良哈)、第四十九例(滿洲)、第五十一例(彙鑪)、第五十二例(福建)、第五十三例(同上)、第五十八例(ブリヤート)、第五十九例(蒙古)などの諸例が指摘せらるべく、又第五十七例(契丹)もこの型に屬せしめてよからう。右諸例の内、例へば高車の例では、最初王姬は天神に捧けられたのであり、その結果そこに神として出現したものは老狼であつて、云はゞ狼は天神の出現形相であり、所謂 *khubilgan* と考へてよく、又蒙古の阿蘭豁阿の例(第四十六例)も、「黃狗の如く爬ひ出づる」ものは、皇天(騰格里)の御子に外ならなかつた。ブリヤートの例(第五十八例)の女王に通づる青灰牛 *BukhaNojon* もその類である。その他の例では、犬なり牛なりが一一神の出現形相であつたことを明記して居ないけれども、これら神話を傳承して居た族人にとつては、殊更に明記する必要のなかつたことであり、従つてそれらの祖獸を何れも右に準じて考へて誤りなからう。なほ參考資料によつてこの種觀念の理解を深めよう。

第六十二例、ブリヤート巫祖神話。

「神々の人間を創造し給ひし時、惡靈より人々を護らんとて兀鷹を遣しけるが、人々この鳥の聖なる使命をも辨

へずして射殺さんとせり。こゝにこの鳥、神のもとに歸りて『人々我を殺さんとせし故、彼等を護る能はず』と訴へしに、神答へて『かへり行きて汝の靈なる力を地上の何人かに與へよ』と再び命じければ、兀鷹又飛び降りて、一人の乙女の羊飼ひ居るを見、森の中に誘ひ行きて呪力を授けぬ。これよりこの女精靈を見るを得、それと交り初めぬ。』(Holmberg, U., p. 505)

第六十三例、ブリヤート巫祖神話。

「初め人間は病を知らざりしが、惡靈の爲に遂にこの不幸を知るに至れり。神々人間を救はんとて一匹の鷲を天降しぬ。この鷲こそ『最初のシャーマン』なり。人々この鳥の務めを辨へざりければ、彼は天にかへるより外なかりき。再び神、地上にて出遇ふ最初の人にシャーマンの性能を授くべきを命じければ、こゝにその鷲、夫より離れて樹の下に眠り居る一人の女に近づきたり。かくしてこの女は娠めり。女、夫のもとに歸り來て睦しく暮す内、一人の男兒を産み落せり。この兒後に巫祖となれり。』(ibid.)

この二つの成巫過程を語る巫祖神話が、同系の異傳であること明瞭であるが、今兩者を比較するに、前者は巫女の交靈——彼等の考へによればシャーマンの性能を持つもののみ靈威的動物と普通の動物とを判別し得てこれと交靈することが出来るのである——を語つて居り、後者では、女が神鷲によつて妊娠したことになつて居る。即ち後者は感精受胎の形式で語られて居るのである。そうして感精神話に於いて、靈威の可見的形相として最も普通なものは鳥類である。この種の始祖神話の著名なものとしては殷祖契、秦祖大業、清祖愛親覺羅などの出自神話がある。

第六十四例、殷祖契の出自神話。

「殷契の母を簡狄と曰ふ。娥氏の女なり、帝馨の次妃となる、三人行きて浴す。玄鳥のその卵を墮すを見、簡狄取りて之を呑み、因りて孕み、契を生めり。」(史記、殷本記第三)

なほ拾遺記卷二には、「商の始め、神女簡狄あり、桑野に遊んで黒鳥の卵を地に遺せるを見るに五色の文あり八百字を作る、簡狄之を拾ひて貯ふに玉篋を以てし、覆ふに朱紵を以てす。夜夢みるに、神母之に謂ひて曰く、爾この卵を懷け、即ち聖子を生み、以て金徳を繼がんと。狄乃ち卵を懷くこと一年にして娠あり、十四ヶ月にして契を生む。」との異傳を傳へて居る。

第六十五例、秦祖大業の出自神話。

「秦の先は帝顓の苗裔、孫を女脩と云ふ。女脩織するとき玄鳥卵を隕せり、女脩これを呑みて子大業を生む。」(史記、秦本紀第五)。

第六十六例、清祖愛親覺羅氏の出自神話。

「滿洲國の基、長白山の日浮き出づる方布庫哩と名付くる山、布勒瑚里と名付くる池より起れり。その布庫哩山の麓なる布勒瑚里池に天つ乙女恩古倫・正古倫・佛庫倫の三人水浴びんと來たりて水より出で衣着ましめるとき末なる乙女衣の上に神鵲の置きける朱き果を得て、地に措かば惜しとし口に含みて衣着るとき、含みし果咽喉にひたに進みて、忽ちにして姪りて、昇り行くこと能はずして曰ひける、『吾が身異しくなりぬ、如何に留まらん』と云ひしにぞ二人の姉曰ひける、『吾等靈丹の藥食べをりき、死なんことはりなし、汝れに上天の命ありて身重くなりしならめ、身輕くなりて後來たれ』と云ひて去りぬ、佛庫倫それより乃ち男兒生みたり」(今西春秋譯「滿洲實錄」)

右三例の中、股祖と秦祖との出自神話が同系ものたるは明らかであるが、清祖の場合も、神鵠の置いた朱果を食したと云ふ點は、股祖のそれから來た要素であらう。但し清祖の出自神話の全脉は、シベリヤ・蒙滿鮮に廣く流布せる羽衣系傳承の一であり、それに股祖の神話要素が取り入れられたに外ならない。

この三例は動物と女との成婚と云ふよりも感精受胎型に屬するものであり、従つて次章で改めて考察されるであらうが、こゝでは只この種の感精神話が獸婚神話の基底にある觀念を、より初期的な形に於いて示して居ることに注意し度いのである。かく感精型が獸婚型に比しより初期的、より基本的であるとされることが、如上の觀念的な比較からばかりでなく、後章で示す如く感精型がその分布に於いて獸婚型や卵生型に較べはるかに廣範であり普遍的であると云ふ事實からも推知出来る。従つて獸婚型は精靈的勢威による妊娠を説く感精觀念の云はゞ特殊的发展形相であり、ここでは精靈的勢威は動物形をとり *khubilgan* として出現して居るのである。妊娠が精靈の力に因由すると云ふ觀念はひとり神話の上に見られるばかりでなく、彼等の現實生活の上に於いても尙ほその痕を見ることが出来る。例へばユカギール *yukaghir* の間では、妊娠は母胎内に祖先の靈が入つたと信じて居る (*Caplicka, M. A., p. 130*)。ツングース族の間では、天の南部に居る *omisi* と稱する精靈が子供に靈魂を與へる。若し人が子を得んと欲すれば、この精靈に祈願をこめねばならない。この精靈は小屋と一本の木とを所持し、その木の上に未だ生れざる子供達の靈魂が鳥の姿でとまつて居ると考へられて居る。 (*Shirokogoroff, S. M., (b) p. 128*)。

滿洲族の間では、女が眠つて居る間に群靈 *group enduri* の一と交つて孕むと云はれる (*op. cit. p. 75-6*)。

などと考へられて居る。勿論かゝる妊娠に對する超自然的な考へ方は、たとへ低級なシベリヤ諸族の間でも、特殊な

ことに屬して居り、既にシロコゴロフが指摘して居る様に、彼等は自然的な妊娠の生理過程に對する認識を充分に持つて居るのであるが、然し少くとも過去の祖先や又はシャーマンの出誕に關する限り、這般の感精妊娠を實際にあり得ることとして信するだけの眞面目さを今なほ失つて居ないのである。

成巫過程と妊娠過程とが相通する基礎觀念によつて理解されて居たことは上述のところでも窺知されやうが、なほ一步進めて云へば、彼等の持つ精靈の觀念を一般的に理解することによつてそれは一層明瞭となるであらう。例へばヤクト族やアルタイ族の *seit* と呼ばれる精靈は、人間の生命の原質とも云ひ得べく、妊娠の際にこの精靈が母胎に入ると考へられて居るが、又一方ではシャーマンの所持する異狀な力を持つ精靈をも同じく *seit* と呼んで居るのである(註二)。かく成巫過程と妊娠及び出誕の過程とが共通の基礎觀念によつて考へられ、且巫覡は女性が基本的であつたとすれば、獸婚神話の内 A 型即ち女性を人態とする神話を以て正常な型式と見る可きであらう。

然らば次に獸神話の B 型即ち男性が人間で動物が女性の位置にある場合は如何に解すべきであらうか。單に何らかの事情で A 型の男女の位置が轉換したものと簡單に考へるのはイージーゴインに過ぎるであらう。A 型を以て正常とすることに充分な理由があつたとすれば、それだけにこの B 型には解し難いものがあるとしなくてはならぬ。それは兎に角として先づ B 型に屬する諸例を通覽するに、なほその内に二つの型があることに氣付くであらう。即ち、

B 型の一。男性が人態であり女性が動物なる場合——第四十三例(突厥第五十例(馴鹿ツングース)第五十六例(キルギ

ス)の三個例。

B型の二。動物が母として子を養ふ場合——第四十二例(鳥孫) 第五十四例(ブリヤート) 同補足例一(ブリヤート) 第五十五例(キルギス)の四個例。

の二者である。考察の順序として後者から始めよう。こゝに「B型の二」として類別した神話例は、母としての動物のみ存し、父(夫)なるものは存せず、特定の子がその母に養はれると云ふ構想であつて、右四ヶ例の外、厥突の神話の前半はやはりこの型である。又徐偃王の話(第二十例)も、獨孤の母の犬が卵子を拾ひ、その母が蛭成して育てることになつて居り、この場合母と犬とは小兒に對して共に母たるの立場にあり、一步すゝめて云へば、一つの原體から老母と犬とが分化した形相に於いてあるものとなし得べく、何れにしても兒に對して母のみ存する「B型の二」に屬せしめ得るであらう。右の諸例のみからしても「B型の一」よりもこの「B型の二」の方がより一般的であり、又かのロムルス兄弟の神話がこれに屬することからもその感が深くされるであらう。廣く神子出誕の神話に於いては、人間の成婚を豫想せず、母と子とのみ存する場合が多く、母の存在が父よりも基本的なることは既に卵生神話の考察に於いても論じたところである。従つてこゝに問題として居る獸婚神話の型に於いても、母なる動物の外に夫(父)の存在を語らない「B型の二」を以て基本型の一と考へてよく、「B型の一」はその特殊相或は發展相であると見てよい。

始祖なる神み子を生んだり育てたりする母性はそれ自ら神聖なる存在であり、且その神聖性は神靈的勢威——動物の形相をとつて出現する——にかゝはるものであり、今これを聖なる機能の方面のみより考へれば、かゝる母は神靈的動物そのものと別箇のものではあり得ない。そこに始祖的神童を育てる聖獸が觀想され、この聖獸から出たり育て

られたりすることが、始祖的神童の資格付けとなるのである。なほつきつめて云へば、聖獸から生れると云ふ生理的な考へ方よりも、聖獸の兒として育はれること、或は聖獸を聖母として持つことがその基本的な考へ方である。ヤクトが部族的聖獸を *jä-kyl* (mother-animal) と呼んで居る所以も亦こゝにある。「B型の二」の内に見える狼野猪或は犬は謂はゞこの *jä-kyl* であり、夫を豫想せざる母獸である。こゝでは母は妻に先位する。

然し *jä-kyl* とその子が人間的に考へられて來る時、子の由來が説明されねばなくなる。烏孫(第四二例)や突厥(第四十三)の例では、はけしい部族間の鬭争の結果、族滅の難に遭ひ、辛じて一人の嬰兒が生き残つたとして子の由來を語り、そこに聖獸が妻としてゝはなく母として存在するを合理的に説明しようとして居る。斯の如き説明の仕方は、農耕部族の間では想到さるべくもないことで、部族鬭争の激甚な遊牧部族社會に於いてはじめて理解出来る説明である。第二十六例及び第五十九例の蒙古の所傳にも這般の説明が見られ、又拉施特(の)所傳に「相傳古時、蒙兀與他族戰、全軍覆沒、僅遺男女各二人、遁入一山云々」(元史譯文證補)と語り出して居るのも同じくこの類型に屬して居る。云はゞ生理的夫婦を豫想せざる始祖的嬰兒の出現を、遊牧部族の生活形態に則して説明したもの、謂はゞ遊牧民族的に規定された傳承の特殊形相をそこに見出すのである。

然し母とのみ共にある始祖的神童の由來が、人事的に説明されて來る今一つの方向として「B型の一」が考へられるであらう。即ちそこでは、母と子とが生理的人事的に觀想され母は母たる以前に妻としてあり、夫——しかも人格的な夫——の存在が考へられるに至る。さうして子の神性は、聖獸的母よりも人格神的な父につながるものとされ、そ

こに獸神から人格神への觀念進化の迹が併せ示されて居る。即ち第四十三例(突厥)では成人した始祖的男子、第五十例(馴鹿ツングース)では天降れる老人、第五十六例(キルギス)ではデンギスカンの王子が夫(父)として登場して居る。勿論かく人格的觀念が進んだ後に於いても基本觀念たる *animus* 的獸母觀念は變更さるべくもないのであつて、そこに人獸成婚が神話的に語られて居るのである。

「B型の二」と「B型の一」との關係を發生的に右の如く考へ得たが、この二者が複合的に組合されて居る特殊なものとして突厥の所傳(第四十三例)が興味深く注意される。即ちその前半に於いては、族滅の難の後生残つた一人の男兒が牝狼に養育されて居り、後半ではこの男兒が成人して牝狼と交つて族祖を生ましめることになつて居る。前半は「B型の二」であり、後半は「B型の一」であり、發生的に前後に置かるべき二者が、一連の話に織り込まれて居るのである。而して神話傳説にあつては斯の如き複合——時間的複合——の例は他にも少くなく、そこに古代人の觀念發展が段階的ではなく、重層的であることが示されて居ると云へよう。

獸祖觀念の神話的表現たる人獸成婚神話を、右の如くA型、B型(一及二)に類別して考察したが、今この二型式を境域的に見るに、そこには注意すべき境域性は示されて居ないのであつて、この觀點より注意される歴史の意義を持つものではない。故にそれは上述の如く觀念的に取扱はれててもよいであらう。たゞ始祖的嬰子の由來を族滅の難によつて説明せるものは烏孫突厥及び蒙古の五個例にのみ限られて居り、それが遊牧境域の規定する特殊形相と見ることが出来る。但しそれがトルコ族に發源したものか、或は蒙古族に發源したものかは決し難いが、たゞ遊牧境域の何處

にも發生し得るものであるとだけは確かに云ひ得るであらう。

後 記

本稿の第一章第二章は本號を以て終り、なほ後に第三章及び總括が残つてゐる。然し掲載された部分だけで既に多くの紙面を使つて來た。これ以上貴重な本誌の場塞きをしてはと心苦しく感ぜられるので、一先づ以上を以て掲載を打切ることとした。こゝまで讀んで來て戴いた讀者諸彦に對しては誠に申し譯けないが、本誌の性質上又止むを得ないところで、この點平に御寛容賜り度い。

第三章に於いては感精型始祖神話を取扱ふ豫定であつたが、今その要點だけを一言して實を果して置かう。前述の卵生型が朝鮮からマライシヤ方面にかけて分布し、これに反し獸祖神話が滿蒙諸族の間に特に榮えてゐたことを指摘し、かゝる地域性は民族移動の問題と民族の生活型態との兩面に聯關せしめて理解すべきであることを注意して置いた。然るにこの感精型(日光及び電光による)は、本稿で取り扱つてゐる全境域を通じて何處にも廣く分布してゐる神話要素である。この點前二者とその境域性に關する點に於いては著しく相違せるものである。このことは日光電光による感精觀念が前二者に比して古きに屬することを示すと共に、生活型態によつて規定せられること又弱きを語るものである。然しその内にあつてもなほ境域的に特徴が見られ、古代韓族の感精神話に就て云へば、それが南方型式に屬してゐることは特に注意すべきである。

總括に於いては、以上の事例よりして神話の持つ境域性と歴史的意義を一般的に顧み、神話を歴史研究の史料として取り扱ふ場合の研究法を反省する豫定であつた。そうして具體的には朝鮮の神話研究の一つの基礎を提供せんとしたのである。(以上、昭和十七年五月十七日記)

註一、アポロンにリュキオス或はリュケイオス (Lykios, Lykeios) と呼ばるゝ性能がある。……これも狼 (Lykos) を殺す神 (Lykotonos) と考へられるのであつて明かに牧畜神としての意義をもつものである。ソポオクレスはエレクトラ (Elektra) の中にアポロンは狼を殺して家畜を守つたものとしてあげて居るのである。ダナオス (Danaos) が埃及からアルゴスへ來つて、ゲラノル (Gelanor) に對して王位を要求した。此の時、人民の間に賛否が決しなかつた。判決を翌朝に延期したその夜、狼が來つて城内の大きな牛を殺した。人々は狼は外來のものであり、ダナオスも外來者である。狼が市中の牛を殺したのは外來者の勝利を意味するとしてダナオスを王とした。そこでダナオスは「狼のアポロン」を祭つたと傳へられる。(原隨國博士著「希臘神話」八一頁)

註二、クザプリッカはヤクートの *sir* に就いて

“The Yakut believe that man is composed of (i) *tyn*, ‘life’, ‘breath’; (ii) *kut*, the physical soul; and (iii) *sir*, the psychic soul. . . . The *sir* enters the mother by way of her temples at the moment of conception. . . . *Sir* is connected with the head. . . . *Sir* is common to man and the animals, and is even possessed by fishes. Troshchanski says that the word *sir* is also used to denote unusual psychic powers, such as are possessed by shamans; and, indeed, according to the legend, shamans receive their heads (the seat of *sir*) from heaven. . . .” (Czaplicka, M. A., p. 279-280)

と説明して居り、トルコタールの *sir* に関し、ホルムベルグは

“*Six* (“appearance,” “beauty,” “comfort,” “power” “soul”) is used when speaking of human soul, the haunting spirit of the dead, the health of cattle, the power of an army, the nourishing properties of bread, etc. Thus, for example, it is said that “when an army loses its *six*, it cannot defeat its enemy.” (Holmberg, U., p. 463.) と説明して居る。